



留萌川

古くから交通路として使われていた穏やかな大河

留萌の語源はアイヌ語の「ルモツペ」で、「静かなる川」という意味です。先住のアイヌの人たちがゆるやかに流れている留萌川をそう呼び、それがいつしか留萌川の河口の辺り、つまり留萌を指すようになったと言われています。

大正初期の留萌川は、天塩山系の南端、空知と留萌との境界を源とし、途中で中幌糠川、チバベリ川などの支流をあつめて西へと流れ、日本海へと注いでいます。当時は、総延長72kmもあり、その蛇行箇所は400にも上ったといえます。現在は河川の改修などにより延長40km程になりました。和人がまだ留萌地方の主役になる前、この留萌はアイヌの人たちの一大中心地でした。現在の元町にコタンがあり、和人との交易が盛んでした。それは、この留萌川の流れが遅く、また深いことから二、三百石程度の船が停泊できる良い港として利用されたからです。さぞかし多くの船が本州や松前などの間を往来していたことでしょう。

留萌川が港として使われていたことは、明治になって留萌港が拓かれる基礎ともなりました。留萌川は内陸への交通路としての機能も持っていました。江戸時代の末にこの地を訪れた探検家の松浦武四郎も、川をさかのぼり奥地へと通じる道をアイヌの人たちが利用していると書き記しています。明治29年(1896年)から開始された内陸部の開拓によって、さらに交通路としての重要度が増し、明治43年(1910年)の鉄道開通まで利用されたといえます。

見どころ

留萌川は河川敷があまりないため、多くの洪水被害に見舞われました。昭和35年(1960年)に留萌川改修計画が策定されてから、本格的に工事が始まりましたが、川の改修に当たっては、護岸に装飾を施すといった市民によるユニークなアイデアがいくつも採用されています。

ポイント

留萌の語源は、留萌川を示す「ルモツペ」(静かなる川)。留萌川河口部は古くから天然の港として、また川筋は上流部の開拓地への交通路としても利用されるなど、留萌の発展の歴史とともに歩んできました。

五感で感じる！風土資産の魅力



アイヌ語で「海水が静かでいつもあるもの」という意味が示すとおり、緩やかに流れる留萌川。そのせせらぎの音を聴くと、自然と心穏やかになるものです。留萌川は、流域の市民に安らぎと憩いの空間を提供しています。



山あいを通る上中流部は豊かな自然環境が残されており、子供たちが川の多様な生き物の観察する体験学習なども行われています。

また、留萌市街地を流れる下流部は施設整備が行われ、散策路やサイクリングロード、毎年開催されている留萌川まつりのイベントの場など、人と川がふれあえるオープンスペースとして親しまれています。



留萌川と留萌の町は密接に関係しています。留萌川から留萌港が生まれ、留萌川に沿って鉄道が走りました。更に2010年には留萌ダムが完成し、今度はそのダムによって留萌川が変わろうとしています。これからも留萌川は、留萌の町と自然を見守っていくことでしょう。

■ 基本情報 (R1.5)

水系：一級水系 留萌川
種別：一級河川
延長：44km
流域面積：270km²